

令和2年度第3回
東京都総合教育会議議事録

日時：令和2年12月10日（木）16：00～17：00

場所：都庁第一本庁舎42階特別会議室B

○藤田教育長 ただいまから令和2年度第3回東京都総合教育会議を開会いたします。

本日は、読売新聞社外6社からの取材と、6名の傍聴の申込みがございました。これを許可してもよろしゅうございましょうか。

(「はい」の声あり)

○藤田教育長 それでは、入室を許可いたします。入室してください。

(報道関係、傍聴者入室)

○藤田教育長 それでは、第3回総合教育会議の開催に当たりまして、冒頭、小池知事より御挨拶を頂戴いたしたいと存じます。よろしく願いいたします。

○小池知事 皆様、こんにちは。座ったままで失礼いたします。

第3回総合教育会議の開催に当たりまして、一言、私の方から御挨拶を申し上げたいと存じます。

教育委員の皆様方には、もう12月でございますが、年の瀬ということで何かとお忙しいところをお集まりいただきました。ありがとうございます。日頃より東京の教育への御協力、誠にありがとうございます。

何よりも今年は新型コロナウイルスに明け暮れ、そして今12月を迎えているところでございます。私たちの暮らし、そして何よりも子供たちの学校生活にはこれまでにない大きな変化が生じているところであります。去年12月ですけれども、東京都では「未来の東京」戦略ビジョンを掲げて、人が輝く「未来の東京」ということで、その東京をつくり上げるためには、やはりまず全ての子供、若者が将来の希望を持つこと、そして自らが伸びて育つ、そんな東京に向けた戦略を描いたところでございます。そして、コロナが始まり、また、今年8月であります。このコロナ禍を踏まえて、構造改革を梃子にして「新しい日常」にしていこう、そしてサステナブルなリカバリー、元に戻るのではなくて、持続可能な回復を目指そうといったような新たな視点から戦略をバージョンアップさせて、長期戦略に結び付けていこうという、そのような考えでございます。

また、世界がこうやってどこもコロナに苦しんでいるところでありますけれども、その中においても東京が世界一の国際都市であり続けるためにも、世界を力強く牽引する役割を果たしていく。そこにはやはり何よりも教育が最も重要になってくるわけでございます。今後、戦略ビジョンに基づいて、長期戦略と方向性を合わせながら東京都教育施策大綱の策定を進めていきたいと考えております。

このように、何事も今は暗中模索の部分もございますけれども、しかし、子供たちが社会の

変化を柔軟に受け止めて、様々なことに粘り強く挑戦する、そして学び続ける、そんな力を育むことが、すなわち東京の国際競争力の源泉ともなり、そして一人一人の自己実現、達成感の確保ということにもつながる、このように思います。子供の目線に立って、一人一人の意欲を引き出す、そして東京の持つ強みを最大限に生かして教育内容などの充実を図るということで、新しい教育の在り方を確立していきたいと考えております。

社会の協力を各方面から幅広く集めまして、また、教育のデジタルトランスフォーメーション。もういや応なくオンライン化も始まっているところでございますし、どんな状況にあっても子供たちの学びを止めることはない、そして子供たちの笑顔を育むのだ、そういう思いでこれからも東京の教育を進めていきたいと考えております。

これまでの御議論を重ねていただいております新たな大綱の骨子案についての御議論もお願いしたいと存じますので、長くなりました、どうぞよろしく願いいたします。

○藤田教育長 知事、ありがとうございました。

前回の第2回総合教育会議では、外部有識者や教育委員の皆様から新たな東京の教育の在り方について御意見を賜ったところでございます。また、現行の東京都教育施策大綱を策定いたしましたしてから、この間、総合教育会議の場において様々なテーマで幅広い議論をし、子供たちを含む様々な声も聞いてまいりました。概要は参考資料として添付しておりますので、併せて参考にさせていただければと思います。

本日は、それらを踏まえまして、事務局において次期東京都教育施策大綱の骨子案を作成いたしました。本日は、この骨子案についての意見交換をお願いしたいと思います。

それでは、骨子案につきまして、私の方から概略について御説明させていただきます。

まず、「未来の東京」とそこに生きる子供たちの姿でございます。

未来の東京の姿は、先ほど知事からもございました「未来の東京」戦略ビジョンで描かれたとおり、グローバル化等による多文化共生社会の進展、先端技術の社会実装の進行などの変化に加え、コロナ禍を経たサステナブル・リカバリーの視点を加味した姿となっております。

こうした未来の社会の担い手である子供たちには、社会の変化を柔軟に受け止め、生涯にわたって様々なことに粘り強く挑戦し、自ら学び続けていく、こういった姿勢が大切になります。

そこで、「未来の東京」に生きる子供たちの姿について、一つは「自らの個性や能力を伸ばし、様々な困難を乗り越え、人生を切り拓いていくことができる」、もう一つは「他者への共感や思いやりを持つとともに、自己を確立し、多様な人々が共に生きる社会の実現に寄与する」というふうに設定しております。この二つの子供の姿の実現を目指すに当たり、子供たちの成

長を、子供の目線を大切にしながら社会全体で見守り、支えることが重要というふうと考えております。

続きまして、今後の東京における教育の在り方についてです。

「未来の東京」で生きる子供の姿の実現に向けた東京の目指す教育を「誰一人取り残さず、すべての子供が将来への希望を持って、自ら伸び、育つ教育」というふうにいたしております。

その実現のために、誰一人取り残さないこと、そして将来への希望を持っていただくこと、そして自ら伸び、育つことのそれぞれについて、必要な取組を行っていきたいと思っております。それぞれの取組から導かれる三つの「学び」を東京の目指す教育の実現に向けた基軸として定めまして、実践してまいります。

その三つの「学び」ですが、まず、全ての子供たちが自ら伸び、育つために必要な、子供の個性と成長に合わせて意欲を引き出す「学び」、次に、子供たちが生涯にわたって粘り強く挑戦する素地を養うための、子供の成長を社会全体で支え、主体的に学び続ける力を育む「学び」、さらに、子供たちの意欲に応え、その力を最大限に伸ばすための、ICTの活用によって、子供たち一人一人の力を最大限に伸ばす「学び」でございます。

この三つの「学び」は、東京の目指す教育の実現に向けた「学び」でありますと同時に、日々の教育活動を形づくる「学び」でもございます。

また、三つの「学び」を実践するに当たっては、未来の社会の担い手である子供自身の目線を重視するとともに、多様な専門人材などの豊富な社会資源、加速するデジタルトランスフォーメーションなどの東京の強みを最大限生かしつつ、東京ならではの教育や学びとして実践していきたいと考えてございます。

そして、これらの三つの「学び」を有機的に連携させて創出する新たな学びそのものと、日々実践・改善を繰り返しながら理想の学びを追求し続ける動き全体のこと、そして、それらによって東京が目指す教育を実現するという教育の在り方を総称するようなイメージということでもあります。そういったことを「東京型教育モデル」と称して位置付けをし、今後の教育施策全体を展開していきたいと思っております。

さらに、「東京型教育モデル」という教育の在り方を社会全体で共有いたしまして、社会変化にも柔軟に対応しながら実践していければと考えております。

この「東京型教育モデル」の実践を進める中で、子供たちの学びの場は学校をはじめとして地域や社会全体に広がっていく、学校以外の部分でも学びが広がっていくというふうな形で展開してまいります。

続いて、この「東京型教育モデル」で実践していく特に重要な六つの事項ということで、一覧で示してございます。

第1に、「一人ひとりの個性や能力に合った最適な学びの実現」です。全ての子供たちがこれからの社会を生きるために必要な基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得し、それぞれの個性や成長段階に応じて能力を最大限に伸ばしていきます。

第2は「Society5.0 時代を切り拓く^{ひら}イノベーション人材の育成」です。社会の様々な課題を主体的に解決する力を育むとともに、イノベーションの創出やデジタルトランスフォーメーションの推進などを担う人材等を育成していきます。

第3は「世界に羽ばたくグローバル人材の育成」です。グローバル化が進む社会において、多様な人々と協働する力を持ち、広い視野と豊かな国際感覚を身に付け、世界を舞台に活躍することができる人材を育成してまいります。

第4は「教育のインクルージョンの推進」であります。全ての子供たちが一人一人の持てる力を最大限に伸ばし、主体的・積極的に社会参加すると同時に、互いを理解しながら交流し支え合う体験を通して、多様な人々が共に認め合い尊重し合う心を育成してまいります。

第5は「子供たちの心身の健やかな成長に向けたきめ細かいサポートの充実」です。子供たちの心の問題や人間関係、家庭状況など様々な状況に寄り添い、保護者や関係機関との連携を緊密に図るなど、学校だけでなく社会全体で子供たちの心身をきめ細かくサポートいたします。ここでは「知」「徳」「体」の特に「徳」と「体」の充実を図っていきたいと思っております。

最後、第6ですけれども、「子供たちの学びを支える教師力・学校力の強化」です。重要事項の1から5までの実践に当たりましては、それを支える教師力や学校力が要となってまいります。また、学校においては、新たな時代の学びに対応するとともに子供の安全・安心を確保することに加え、地域の拠点等となる役割が期待されております。そうした機能や役割を十分発揮するために、教師の指導力の向上、学校の施設・設備の充実を図り、学校の力を更に強化していきたいと思っております。

骨子の説明は以上となりますけれども、次の5ページの方に、今後の意見交換を進めていただくに当たって見やすいようにというか、ちょっと細かいのですが、次期大綱骨子案の体系を一覧でお示しさせていただいております。これまで御説明した骨子案の内容につきまして、三つの章立てとして構成してございまして、第1章は「「未来の東京」とそこに生きる子供たちの姿」、第2章は「東京における教育の在り方」、第3章は「「東京型教育モデル」で実践する特に重要な事項」ということで、この3章立ての構成を今考えてございます。

私からの説明は以上になります。

それでは、ただいま御説明申し上げました大綱骨子案につきまして、これから意見交換をお願いしたいと思います。

なお、骨子案は、机上に紙で恐縮ですが配布しておりますので、適宜御参照しながら御発言いただければと思います。

では、まずは第1章の「「未来の東京」とそこに生きる子供たちの姿」について御意見を伺ってまいりたいと思います。教育委員の皆様方から、いかがでしょうか。

○遠藤委員 遠藤でございます。それでは、第1章、自らの個性や能力を伸ばしという、「未来の東京」とそこに生きる子供たちの姿ということについてお話をしたいと思います。

そのことを考えるときに大切なことですが、直面する現実の課題を子供たちあるいは学校現場が正確に認識することと私は考えております。何が課題か、直面する現実の課題は何かということ、かねてから私はこの場でも申し上げてきたことですが、4つの「化」への対応ということをお話ししてまいりました。それらは、国際化、ICT化、少子高齢化、温暖化の4点でございます。未来の子供たちは、この4つの「化」から生ずる様々な課題、困難に直面するわけですが、ただ、ここに来て、私は厄介なことという言葉をあえて申し上げますけれども、知事からもお話がありましたように、これらに新型コロナウイルス、この問題が突然降りかかってきたということでございます。

例えば、少子高齢化に伴う日本の経済社会の体力低下、これを補うために、国際化、国際的水平分業の進展というふうには私は考えておりますけれども、これによって体力低下を補うことを考えていたわけですが、このコロナの問題により、なかなかそれも難しくなってきた。未来の子供たちは、少子高齢化に伴う対応、これも子供たち自身の問題として考えていかなければいけない。問題がより複雑化しているということも認識する必要があるのではないかと考えております。

こうした事実認識の上で、子供たちは、これらの課題克服のため、具体的に目標を立て、これを実践していく。例えば国際化であれば、語学力だけではなく、国際的な人間として通ずる人間力、こうしたものを身に付けていかなければいけないということでございます。当然これには多くの困難が伴うわけですが、それを乗り越える強い心も同時に教育の現場で育ていかなければいけない。ある意味では難しい対応を迫られるということですが、これは現実の問題として我々自身、子供たちも含めて認識していかなければいけないということでございます。

こうした問題が自らの課題であるということを知った子供たち自身に認識してもらい、あるいは認識させるということが大切であることをここで申し上げておきたいと思います。

以上でございます。

○藤田教育長 ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○秋山委員 秋山です。「未来の東京」戦略ビジョンで描かれている未来の東京の姿には、グローバル化等による共生社会の進展とあります。そのグローバル化を実現するためには、未来の東京に生きる子供たちの姿として、他者への共感や思いやりを持つとともに、自己を確立し、多様な人々が生きる社会の実現に寄与するという目標はとても重要だと思います。

先日、私は診療所に新しい電子カルテを導入するために事業者とやり取りをしました。導入方法が全てオンラインで、当方には対応できるITの技術が必要であったことと、また、相手は私のほうの状況を十分理解する必要がありました。しかし、一方向の情報提供についていけず、導入を断念したところです。ITを介するには相手の状況や立場を十分理解するという、対面以上に相手を思いやる必要があるということに身をもって気づかされました。今回掲げられている、他者への共感と思いやりを持つことは、IT社会を生きていくために子供たちには不可欠です。

さて、今回のコロナ禍で学校の役割に改めて気づいたことですが、学校での学びには、机上で学習することとともに、みんなで実体験をすることで得る喜びも大切だったということです。コロナ禍においては、この部分が実施しにくかったのではないのでしょうか。実験などで体験する活動や共同作業などによって、子供たちが助け合うことや人とつながっている実感を経験させてあげることがとても大切です。学校は他者への思いやりを育むことができる重要な場所があります。

前回の総合教育会議でも申し上げましたが、コロナ禍で学校が休みになって生き生きとなった子供たち、また、その保護者も登校させねばという葛藤から解かれて、ほっとされていました。学校が苦痛になる場所であっていいのかわかるといいます。学びは自ら選択するものであり、学校だけを学びの場にしてしまうことで、不登校というレッテルを貼られてしまいます。多様な学びを選択できれば、不登校という言葉はなくなり、その多様な学びを受け入れることも多様な人の存在を認めることにつながると思います。

以上です。

○藤田教育長 ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。よろしいですか。

それでは、時間もございますので、次に第2章の「東京における教育の在り方」という方に移ってまいりたいと思います。この件に関して、御意見。

○北村委員 北村です。どうもありがとうございます。

先ほど知事からお話がありました、世界を牽引する教育、すごく大事なことだと思うのです。東京が日本の中で一つのモデルを示していく、そういう大きな力を東京の教育は持っていると思うのです。また、東京の子供たちはそれを実現していく力を持っている子たちがたくさんいると思うのです。これからの時代、例えば1つの解で何か解決するわけではないような時代には、この学び続けるというのは、例えば学び方を学ばないと、何か知識やスキルを身に付けて、それがいつまでも通用するような時代でなくて、新しいことをどんどん学んでいく、その学び方を身に付けていく。そういうことよって自立して、自ら立って主体的に学ぶ。これが、先ほど知事がおっしゃったようなサステナブル・リカバリーをしていく中でも、一人一人が自立していないと、そのリカバリーというのはできないと思うのです。ですので、そういった力を育むというのは非常に大事なメッセージだなと感じております。

ただ、同時に、では全ての子供がそれをできるか、そういう環境にあるかと考えると、やはり経済的な問題であるとか、あるいは家庭内の虐待とか、様々な問題がある中で、困っている子、苦しんでいる子もいるのも現実だと思います。この中で、この第2章で「誰一人取り残さず」というメッセージは非常に大事だと思いますし、前回の総合教育会議、その前もそうですが、インクルーシブ教育の大事さを強調していましたが、そういった苦しんでいる子、困っている子を見捨てないよ、東京は大変な子供たち、あなたたちを見捨てない、そういうメッセージも同時にきちんと出していくことが大事だなと感じています。

先ほどデジタルトランスフォーメーションのお話もありましたけれども、今回この新型コロナウイルスの影響の中でデジタル化が導入されて、1つ明らかになったのが、格差の問題が明らかになったと思うのです。どうしても家庭環境によってはそんなに容易にデジタル化に対応できない子たちもいる。ただ、同時に、デジタル化によってその格差を縮める可能性もあるのだと思っております。ですので、格差が広がることのないように、そこには十分に気をつけながらも、むしろデジタル化することの利点を生かして、先ほどの「子供たちを見捨てない」というメッセージをきちんと出して、誰一人取り残されないような、その中で全ての子が自立して、まさに自分たちでサステナブルな社会をつくっていく、そういう担い手をつくる。この第

2章ではそういうメッセージを非常に強く打ち出して、それこそが東京型教育モデルだということをやび強調していきたいなと感じております。

○藤田教育長 ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○宮崎委員 この「東京型教育モデル」には非常に重要な意味があると私も思っております。

まず、ポイントの1つのICTについては、今年のコロナ禍の中で、好むと好まざるにかかわらず、これは飛躍的に伸びた分野ではないかと思えますし、学校現場でもいろいろな努力、工夫がされてきたところだと思いますが、そこで得た知見というのをこれからどう生かしていくかというのが非常に重要なテーマではないかと思えます。「子供たちの個性を伸ばす」とうたい文句にするのですけれども、これまで現場は輪切りと偏差値教育で、一斉に同じところまでいかにマスターするかの行き方が多かったような気がするのですが、ICTになると、固まりでいる子供たちに特定の先生が向き合うのではなくて、1対1で全部つながっているわけですね。だから、まさに一人ひとりの個性、能力を見極めるという手段を手に入れたということになるのではないかと思いますし、そういうことで導き出していくと、例えば教育制度自体も、6・3・3制で今まで来た、このままでふさわしい場面もあるかもしれないけれども、改革するほうがいい場面もあるかもしれない。ちょうどこのたび都立の小・中・高一貫校というのが設置される運びになりまして、まさに小・中・高の一貫した教育プログラムの中で、今まさに検討しているところです。8・2・2にするのかとか、いろいろなことを検討しておりますが、先取りした学習ができるのかとか、あるいは少し待つてほしい子供たちがどのように待つてもらえるのかとか、そういう工夫が物理的にもできるようになったと思うのです。だから、こういうことも、仕組みも含めて個性を伸ばすということをや、ICTを使っていかにやっていくのか。もう一つICTの大きな特徴は、時間、空間を超えるということですから、まさに教育の国際競争力です。東京モデルが比較・分析あるいは切磋琢磨するのは、世界の各都市のこれから進んでいく教育を鏡に映しながら見ていく必要があるのではないかと思っております。その意味では、ICTをいかに使って、そこで何を教えるのか、どう役立てるのか、どんな手段にするのか。場合によっては手段が目的を実現化するという逆の矢印も起きますので、どのように位置づけるのか。

教科の学習だけではなくて、もう一つ浮かび上がってきたのは子供の人間関係ですね。ずっとパソコンの中だけで完結してしまうと、実際に触れ合う人間関係というのは非常に難しいところがありますから、学校の大きな役割は、社会をつくっていく人間関係を育てていくという

ところが非常に大きいと思いますので、それをICTも使いながらどう磨き上げていくのか、この辺は大きな課題ではないかと思っております。

いずれにしても、世界第一の大都市である東京のモデルというものが見える形で世界に向けて発信できるということをしかりと自覚しながら進めていったらいいのではないかなと思っております。

○藤田教育長 ありがとうございます。

遠藤委員、お願いします。

○遠藤委員 子供の学びを社会全体で支えるということですが、ポストコロナという言葉、あるいは先ほどから出ているサステナブル・リカバリー、これを実現していくためには、社会全体で支えるという視点が最も重要ではないかなと思っております。

と申しますのも、私、1945年生まれで、もう75年生きているわけですので、この75年間を振り返ってみると、いろいろな困難がありました。特に昭和20年代から30年代にかけては戦後の混乱期で、大変な時代でありました。その中で、物はない、何もない中で我々が育てられたのは、あるいは近所のおじさんたちに育てられたかなど。学校に行っても青空教室で二部授業というような中で、学校現場だけではない、いろいろな社会全体、周りの人たちからいろいろなことを教えられてきたかなど。そうすると、このポストコロナあるいはサステナブル・リカバリーということを考えるとき、このコロナの問題が世界全体の問題であるということを考えると、どういうことか想像はなかなか難しいのですけれども、ひょっとすると、私が育った戦後の大混乱期に匹敵することなのかもしれない。そうすると、あのときと同じように、社会資源、豊富な社会資源ということがこの骨子の中にもありますけれども、企業の人材だとか、あるいは地域の人たちだとかが総がかりで子供たちを育てる、そういう視点が必要になってくるのかなど。

ただ、そのときに、例えばよく私も近所のおじさんたちに怒られたのですけれども、今の社会ですと、ひょっとすると、マスク警察とか自粛警察とか、そのような観点で捉えかねないので、地域の大人たちが「余計なことは言うまい」というようなことが出てくるのかもしれないけれども、そうしたことのないような雰囲気もつくっていくことが大事なのではないかなと思っております。

以上です。

○藤田教育長 ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか。よろしいですか。

では、この辺りでよろしいですか。何かもしございましたら。

○小池知事 既にいろいろな活発な御議論をいただきまして、誠にありがとうございます。

コロナは見えないのにいろいろなものを見せてくれているということも言えると思うのですね。オンラインで、小さなスマホでというのは見にくいとか、こういった点は改善するとしましても、リモートで先生とじかに話をすると。それもまた残るわけですね、いろいろな意味で。こういうのはいろいろな暗中模索、試行錯誤をこれからも続けることになると思いますけれども、子供たちにとっても初めての事象ですし、教える側でも大変苦労があると思うのですが、ここはいろいろ工夫を重ねながら、これからどんな場合があったとしてもオンラインとリアル両方ができるようにしておくというのは、教育を提供する側として必要な考え方なのではないかなと思います。国のGIGAスクール構想なども含めて、これからオンラインもリアルも両方の良さを引き出せるような、そういう方向性を持っていく必要があろうかと思っています。

それと、例えば香港の民主化のリーダーの女性が日本語が上手なのですね。別に留学したことないというのですけれども、みんなYouTubeで日本語や、日本で今何が起きているかというのを全部フォローもしていて、すごい時代だなと。実際に学校の方にも行きましたら、YouTubeではありませんが、直接フィリピンの人と英会話をしていたりとか、こういうのはやはりこれからどんどんオンラインをむしろ積極的に使うことによって、国境を超えて、言語を超えて子供たちがつながるといような、そういう状況が生まれつつありますので、教える方も大変だと思いますけれども、語学は、学ぶだけではなくて使うことの楽しさなどもこれからも教えられるようにしておく必要もあろうかなと。そういう意味では、教育のICT化というのは推進していく価値は大いにあるかと感じております。

デジタルディバイドといったら大体、高齢者はよく分からないといえますけれども、子供たちの間でも、持っているツールによって、学びができる子とできない子が出てくる可能性がありますので、そういったことなどにも気配りをしていかなければならないなど。

最後に、秋山先生、電子カルテ、入れられた方がいいと思いますので、頑張ってください。

(笑声)

○藤田教育長 知事、ありがとうございました。

それでは、子供たちの姿、それから教育の在り方ということでここまで御意見を賜ってまいりましたけれども、続きまして、これらを具体化していくための六つの重要な事項ということで、第3章の方に意見交換を進めたいと思います。

では、これからまた、今までのことも含めてでも結構でございますので、この六つの重要事

項の関係で御発言賜ればと思いますが、いかがでしょうか。

○山口委員 山口です。「子供たちの心身の健やかな成長に向けたきめ細かいサポートの充実」といったところで少しお話をさせていただきたいと思います。

社会が非常に多様化しているということに伴って、子供たちも非常に多様化していると思います。抱えている課題ですとか問題あるいは悩み、困難さといったことも非常に多岐にわたってきている。いじめということが問題になっていますけれども、このいじめについても画一化されたものではなくて、いろいろな事案も出ておりますし、近年ではSNSがということもありますが、恐らくそういったことも今後変化もしていくでしょうし、いろいろなことが出てくると思います。

そういったところから言いますと、私もそうなのですが、人間というのはどうしても自分が生まれ育ってきた経験値を基に思考を展開するので、なかなか大人が気づけないことや、大人が考えつかないようなことが出てくるだろうと思うのです。ですから、教師もそうなのですが、自分たちの考えのみで判断し、そして対応するというのではなくて、やはり学校あるいは教師以外の外部にも、今でもやっているのですけれども、より以上に専門家等を活用していきながら子供たちに寄り添っていくという姿勢が重要なのかなと思います。

そして、特にこの専門家というと、大先生と言うとなんですけれども、割と年齢の高い先生を求めがちなのですけれども、実は若い人たち、自分がついこの間まで生徒だった、学生だった、そういった人たちにも知見を求めていくというような姿勢も実はこれから重要になってくるのかなと思っています。先ほど来出ていますが、少子化に伴って、一部の人間が活躍すればいいということではなくて、全ての人たちがそれぞれ持っている能力を社会で発揮していただくことがより以上に大切になってきますので、その能力を評価する視点も画一化せずにしていく必要があるかなと思います。

私、スポーツで近年感じているのは、私はどちらかというと勝負事が好きで、勝ち負けにこだわる体質ではありますが、子供たちがみんなそう思っているわけじゃないのですね。ついつい親は「頑張れ」とか「勝て」ということを応援するのですけれども、試合そのものが好きじゃないという子供も実はたくさんいるのです。試合に出たくないとか、ただ楽しめるということがすごくいいのだという。あっ、そういう子たちもいるのだなと。当たり前のことなのですが、そんな1つのところをとっても、私たちが画一的に評価していたのではないかと思うところがあります。

それから、オンラインで学びを進めることができるということが分かったことはすばらしい

のですが、「知」「徳」「体」でいうと「徳」あるいは「体」といったところはなかなかオンラインでは難しいと思いますので、その辺りはやはり学校を超えて家庭あるいは地域といったところで子供たちをサポートしていくような関係性をますます強化していくといったところが必要になってくるなと思っております。

○藤田教育長 ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○宮崎委員 一人ひとりの個性や能力を伸ばすというのはとても大事だというのは根本の柱にあるわけですがけれども、そのときに我が国の社会の質も一緒に育てていただきたい。横並び社会で横一列一直線に並んで、一歩前にはみ出すと出る杭は打たれる、一歩後ろにはみ出すと落ちこぼれ。こういうことで、平均値でない暮らしにくい社会というのを何とか直さないと、一人ひとりの個性や能力というのは伸びない、伸ばせない。今、親が朝子供を学校に送り出すときに、「目立たないように行ってらっしゃい」という事態があるわけですね。これはやはり改善しないと、せっかく教育の現場で個性を伸ばそうとしても、その個性がいじめにつながったり、様々なトラブルにつながったりということになってしまうと、結局は矛盾したことになりますので、社会全体の受け皿としての雰囲気とか文化全般というか、そういうことも育てていく。教育というのは学校の中だけではなくて、生涯教育とかいろいろな言い方がありますけれども、社会全体と一緒に育っていくというのも教育だと思いますので、東京モデルはぜひ、いわゆるステークホルダーというのを非常に広く考えて進めていけるといいなど。

そうすると、場合によっては学習指導要領などともそぐわない場面も出てくるかもしれませんがよね。さっきの6・3・3制かどうかみたいなことをやったり、あるいは、得意な子は上の学年の勉強を先取りしてできるような仕組みをつくってみようかという、学習指導要領からはみ出しちゃったりする。そうすると、ナショナルミニマムとの関係というのも出てくると思います。これはすごく政治的な判断になってくると思いますので、そういうことも、本当に東京教育モデルとして進めていくときには、粘り強く交渉しながらというのでしょうか、その部分も東京はこうしていくということを主張できるような環境を整えるのも大事ななと思います。その上で、この1番目の「個性や能力に合った最適な学び」というものが初めて実現できるのではないかと思います。

○藤田教育長 ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○秋山委員 知事、電子カルテ、ありがとうございます。別の事業者で電子カルテを入れま

して、来週から新しくなります。ありがとうございます。（笑声）

私は「教育のインクルージョンの推進」について一言申し上げたいと思います。

全ての子供を誰一人取り残さず社会参加できるように育成するためには、インクルーシブ教育がとても重要です。社会参加の中には地域で生きていくことも包含され、全ての子供たちが地域でつながって生活していくことを目指したいと思っています。

現在、学校教育において、特別支援教育はとても充実していて、子供たちに合った教育環境が用意されています。専門性が生かされた教育が受けられる反面、この専門的な環境が今や地域から子供たちを隔離し、また、同じ学校内でさえ、障害のある子供たちは分離されていることもあります。障害だけではなく、LGBT、外国籍など多様な人々と学校生活において接し、共に生きる経験が子供たちには重要ではないでしょうか。今は残念ながらその機会を子供たちから奪っているようにも見えます。

実際には、特別支援学校を選択すれば、もう地域の公立学校には戻れないという悩みもあります。双方の教育環境を柔軟に結ぶ、選ぶ仕組みがあれば多様な学びが選択できますし、また、特別支援学校と公立学校の交流にITも活用すれば、インクルージョンの推進にもなるかもしれません。現在、増え続けていると言われている発達障害の子供たちは、公立小学校への特別支援教室の全校配置によって、きめ細かい支援を受けることが可能になりました。教職員の支援体制も向上してきましたが、まだ十分とは言えません。特別支援教育やインクルーシブ教育を進めるには、病気や障害があってもなくても、全ての子供を地域で受け入れていく姿勢と専門性、そして人員配置の拡充が今は必要だと思います。

以上です。

○藤田教育長 ありがとうございます。

ほかに。

○北村委員 僕は「世界に羽ばたくグローバル人材の育成」について少しお話しさせていただきたいなと思います。国際都市東京におけるグローバル人材の育成とは何かというと、そもそもグローバルって何かということから始まるのだと思うのです。先ほどからのお話の中に出てきた言葉で「多様性」というのがありますが、多様な価値観とか多様な文化的背景、多様な考え方、多様な生き方、文化、そういうものを持った人たちが一緒になって一つの社会をつくり上げていく、それこそがグローバルな社会の在り方だと思うのです。

そのときに大切なことは、当然ながら他者を理解することですけれども、その前提として、自分たちの社会とか自分たちの文化のこともきちんと理解していないと、他者のものは理解で

きないと思います。そういう意味で、この東京におけるグローバル人材の育成というのは、単に英語ができるとか、単に国の外に出ていくではなくて、多様な世界、多様な社会の中で活躍する子供たちを育てるというのが大前提になるのかなと思います。

そういう意味で考えたときに、今、都立高校の中では国際高校などが非常に優れた教育をしてきましたし、それは本当に素晴らしいものがあると思うのですが、今度、続けて新国際高校をつくる予定で今準備を進めていますけれども、これは第2国際高校ではなくて、新国際高校であるべきだと思うのです。何かといいますと、今度の国際高校、これが例えば、今まで海外にも行ったことがない、東京で生まれ育って、東京の学校教育を受けてきて、でも、いつかグローバルに活躍したいという子たちをまさに育てる、グローバル人材を育てる、そういう学校をつくる。これは前から僕いろいろところで申し上げているのですが、では、そのために何が大事か。もちろん語学は大事です。でも、それは英語だけではなくて、例えば国語をきちんと、どのくらいできているのか。例えば入試で国語の配点を倍にするとか。むしろ日本語がきちんとできて、日本のことをきちんと理解して、しかもそれを今度は外国語を使って伝える、そのようなグローバルな人材を育てることが非常に大事ではないかなと思いますし、多くの東京の子供たちは、基本的には東京で生まれ育っているわけで、この子供たちが外に目を向けていくきっかけになる。その新国際高校は一つのシンボル、一つのメッセージとして、外国語の運用能力も大事にしつつ、日本語の運用能力、そしてまさに日本のことをよく知る、そのようなメッセージが大事ではないかなと思っています。

このためにもう一つ大事なことが、外に出るだけがグローバルではなくて、まさに東京はもうグローバルな社会になっているわけですので、東京にいる人たちをいかに活用するか。ここにももう留学生がいたり、外国にルーツを持つ方々がたくさんいたりするわけで、この方々との触れ合いとか、もう一つは、先ほど知事がハイブリッドというお話をされていましたが、そういったリアルな対面に加えて、インターネットを使って国外の人とも触れ合う、そういう場面をつくって、まさに先ほどおっしゃっていたような語学を使う楽しみとか、コミュニケーションを取る楽しみを、しかも外に出なくても、国内でもできるのだということに気づいてもらって、世界と東京は地続きでつながっているという感覚を持った、本当の意味でのグローバルなマインドセットを持った人材を育てていきたいなど。そのような東京の教育というのが実現していくといいかなと思いますので、先ほど新しい国際高校というのを一つの例として挙げましたけれども、それ以外にも、TOKYO GLOBAL GATEWAY とか、いろいろな仕組みを今つくっていますから、そこで1つずつでメッセージをきちんと出していくことが大事ではないかなと

思っております。

○藤田教育長 ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○遠藤委員 イノベーション人材の育成、その観点で一言申し上げておきたいと思います。

先ほど来、ポストコロナということを上申しているわけですが、ポストコロナの後、サステナブル・リカバリーを果たしていかなければいけない。そのために、イノベーション人材の育成が不可欠、極めて大切。これは申すまでもないことなのですが、ただ、私が先ほど申し上げましたように、長年生きてまいりますと、ふと振り返ると、イノベーションというのは決して目新しいことではないということなのですね。私は大学で4年間経済学を学びまして、その後、日本銀行ほかで実務家エコノミストとして日本の経済社会を見つめ、たくさんの浮き沈みを見てまいりました。ニクソンショックの後の固定相場から変動相場への移行、あるいはオイルショックの後のハイパーインフレーション、そしてその後の景気低迷、あるいは震災等の自然災害、そうしたものの中で、直近でいきますとリーマンショックの後の問題というものも経験してまいりました。その一つ一つの沈んだところからのはい上がりを日本経済はしっかりやってきたのですね。その要因は何かというと、まさにイノベーションであり、同時に、もう一つ、クリエイティブディストラクション。デジタルトランスフォーメーションというDXの概念がありますけれども、まさにトランスフォーメーションを実現していく。これもまた目新しいことではなくて、私どもが経済学を学ぶときに教えられる、シュンペーターの言うイノベーションとクリエイティブディストラクション、この2つが壊れかけた社会を立て直す。そのテーマが、日本経済がこの数十年の間に、浮き沈みの間に見事に果たしてきた。日本のこれからの教育を考えると、特にコロナ後には重要なのは、この2つの視点ではないかなと思っております。

その面で、東京の教育という観点で、DXということを中心に据えていこうと。先ほど来お話をありますが、極めて正しい方向と思っておりますので、教育の現場でそれを具体的に実現していくよう、我々もサポートしていければと思っております。

以上です。

○藤田教育長 ほかにいかがでしょうか。

○山口委員 今まで話をしてきた「東京型教育モデル」、ここにある6つの事項。横並びで書いてありますが、恐らく1番から5番までを実現するためには6番が基盤になるのかなと思います。つまり、教師力、そして学校力、これがあってこそ実現できると思っております。

例えば1番の、一人ひとりの個性や能力に合った学びを提供する。その学びを提供できるのは、やはり教師の力だと思うのです。そういった意味では、この教師力の強化というのは喫緊の課題だと思っています。私、大学に勤めておりますが、年々、教師になりたいという学生が減っております。恐らくそれは学校現場での労働環境であるとか、あるいは保護者への対応であるとか、なかなか教師という職が、魅力はあるのだけれども、どうしようかなというふうに迷ってしまうような学生たちが増えているというのが現実だと思います。ですから、できるだけそういったイメージを払拭しながら、教育に携わるといふことの意義であるとか価値といふところをもっと見せていく必要があるかなと思っています。

それこそICTも始まりますし、グローバルとかいろいろな今出てきたこと、教師の人たちは大変なのですよね。生徒が学ぶより先生が学ばなきゃいけないという時代で。ただ、子供たちがそうであるように、学ぶということが、やらされるではなくて、学んで自分が成長すること、先生方も喜びを持って楽しんでいただいて、「やらされる」から「自分から学ぶ」というところにマインドセットをしていく必要があるのではないかなと思っています。ただでさえ忙しいのに、これもあれもというふうに、今はそのように思っている節もありますので、その辺りをどのように変えていくかというところがあると思います。

もう一つは、学校力の強化として、先ほど来出ていますけれども、学校だけでできるということは限られていると思います。地域であったり、家庭であったり、その連携をさらに強化して、もちろんハード面、例えばWi-Fiの環境を整えるとか、いろいろあると思いますけれども、それ以上にコミュニティがつながって、みんなで子供たちを育てていくのだということ、いま一度共有しながらやっていくということが重要なのではないかなと思っています。

○藤田教育長 ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。よろしゅうございますか。

それでは、ちょうど時間的にも迫ってまいりましたので、すみません、ここまでとさせていただきます。ただいまいろいろと多方面にわたりまして、制度的な問題も含めて、マインドの問題も含めていろいろ課題も御提示いただいたところかなと思っていますので、この辺はまた反映させていきたいと思っています。

それでは、お時間も最後の方になってまいりましたので、最後に知事から締めくくりにあたりまして御発言いただければと思います。

○小池知事 大変活発な御議論をいただきましたこと、まずもって御礼申し上げたいと存じます。

冒頭申し上げましたように、このコロナ禍というのは、いろいろな見えなかったものを見せつけられたと言ってもいいかと思います。また、これまで日本が変えられなかったことを変えざるを得ないような状況にもなってきました。DXの遅れなどは本当に憂うべき状況が、ここへ来て一気に進んできているという、遅れながらもより先を見て進めていく。教育などは正にその一例といいましょうか、必要な例だと思います。一方で、ICTやオンラインなどで慣れ親しんできますと、私がよく例に出します『第三の波』という、70年代にアルビン・トフラーという未来学者が提唱した情報化の時代という、そこで幾つか興味深い点を示していました。それは、インターネットによって知識などがみんなでも共有できるようになると権威がなくなるというのですよね。先生って、ある意味、教える側ですから権威なのですよね。ところが、子供たちが、また誰でもが何でもネットで調べるようになったら、その子にとってとても興味のあることは教える側の先生よりも超えていたりすると権威がなくなっちゃうんじゃないかということであったり、お医者さんが最後に処方してくれる、何という薬かよく分からないけれども、書いてあるのを、だんだんそれを見ればどういう薬かと分かって、あっ、こんなのを処方しているわと思って、だんだんお医者さんの権威——秋山先生は大丈夫だと思いますけれども。(笑声)ただ、そうやって社会のこれまでであったオーダーがかなり変化する。ということは、学校の現場では、先生も、親も、子供たちも、こういう新しい状況において、それこそサステナブル・リカバリーをどう見付けていくかというのは、本当に東京にとりましても極めて重要な課題であります。

冒頭申し上げましたように、東京がこれからも持続可能な成長を遂げて、そして、そこで学び育つ子供たちにとって自己実現ができる、そういう東京にするためにも、教育という学びの場をどうするか、一番肝心なところでございます。今日は様々御意見をいただきました。それらも踏まえながら、これからもこの東京都教育施策大綱、この策定を目指しまして進んでいきたいと考えております。

様々な御意見を賜りましたこと、改めて御礼申し上げたいと存じます。今後ともよろしくお願いたします。

○藤田教育長 知事、ありがとうございました。

ただいま知事からもございましたとおり、今後、本日の御意見を踏まえまして、事務局の方で大綱の骨子を修正等も踏まえましてまとめさせていただきたいと思っております。さらに、大綱の骨子につきましては、今月の下旬から1月下旬ぐらいにかけましてパブリックコメントということで広く都民の皆様から、子供たちも含めて意見を募集したいと思っております。子供たち

にはまた平易な問い方も含めて、ちょっと工夫をしながら平易な言葉で問い掛けをしてみたい
と思っております。

今回は、本日の議論やパブリックコメントの結果等を踏まえまして、最後また点検をして
いただくというような形になろうかと思いますが、よろしく願いいたします。

本日の議事は以上でございます。

本日は誠にありがとうございました。以上で本日の会議を終了いたします。どうもありがと
うございました。